

開運の鼓

国枝史郎

青空文庫

將軍家齊の時代であつた。天保の初年から天候が不順で旱天と洪水とが交へ。《こもごも》襲い夏寒く冬暑く日本全国の田や畑には実らない作物が枯れ腐つて凶年の相を現わしたが、俄然大飢饉が見舞つて来た。將軍家お膝元大江戸でさえ餓がひよう芋道なまぐさに横たわり死骸から発する腥なまぐさい匂なまぐさいが空を立ち籠めるといふありさまであつた。

上野広小路に救い小屋を設けて、幕府では貧民を救助した。また浅草の米蔵を開いて粃もみを窮民に頒つたりした。しかもちろん

こんな事では日々に増える不幸の餓鬼どもを賑わすことは出来なかつた。米の磨とぎしる汁を飲むものもあれば松の樹の薄皮を引き撈むしつてするめ鯛のようにして食うものもあり、赤土一升を水三升で解きそれを布の上へ厚く敷いて天日に曝らして乾いたところへ麩ふの粉を入れて団子に円め、水を含んで喉を通し腹を膨らせる者もあつた。金はあつても売り者がてないので、みすみす食物を摂ることが出来ず、錦の衣裳を纏まとつたまま飢え死にをした能役者もあつた。元大坂の吟味与力の陽明学者の大塩平八郎が飢民救済の大旆たいはいのもとに大坂城代を焼き打ちしたのはすなわちこの頃の事である。江戸三界、八百八町、どこを見ても生色なく、蠢うごめくものは飢えた人、餓えた犬猫ばかりであつたが、わけても本所深川辺りは当時の盛

り場であつただけ悲惨みじめさは一層目に立つた。

その本所の亀沢町に身分こそ徳川の旗本であつたが小祿の貧しさは損じた門破れた屋敷の様子にも知れる左衛門太郎という武士があつた。実子の麟りんたろう太郎はまだ少く額わかには前髪さえ立てていたがその精悍さは眼付きに現われその利発さは口もとに見え、体こそ小さく痩せてはいたが触れば勿ね返しそうな弾力があつた。

彼の一家も饑饉ききんに祟たたられ、その日その日の食ぶい扶持ちにさえ心を労さなければならなかつた。その貧困のありさまは彼の日記にこう書かれてある。「予この時貧骨に到り、夏夜無かやなく、冬無きんなく衾、ただ日夜机よに倚よつて眠る。しかのみならず大母病氣にあり、諸妹幼弱不ことをか解い事せず、自ら縁を破り柱を割さいて炊かしぐ、云々」ところで

父の左衛門太郎は馬術劍術の達人で氣宇人を呑む豪傑ではあつたが平常賭け事や喧嘩を好んで一向家事を治めなかつたので一家の会計は少い麟太郎が所理わなければならなかつた。

ある朝、麟太郎はいつものように破れた縁へ腰を掛け米の徳利搗きをやつていた。徳利搗きというのは他でもない。五合ばかりの玄米を、徳利の中へ無造作に入れて櫛の棒でコツコツ搗くのであつて搗き上がるとそれを篩にかけその後で飯に炊ぐのであつた。彼は徳利搗きをやりながらも眼では本を讀んでいた。

その朝も米を搗き終えるといつものように釜へ移しに縁を廻つて厨へ行つた。竈の前へ片膝を突いて飯の煮えるのを待ちながらも手からは書物を放さなかつた。武経七書を讀んでいるのである。

紙の破れた格子窓からすぐに往来が見えていたが、その往来に
佇たんで小鼓こつづみを打っている者がある。麟太郎は書物から目を上げ
て音のする方を眺めて見た。銀のような白髪うしろを背後で束ねたば繻珍しゅちん
の帯を胸高に結んだ藤ろうたけた老女がこつちを見ながら静かに鼓を
調べている。その物腰が上品で乞ものもらい食ねいろの類とは見えなかつた。
麟太郎はしばらく耳を澄まして鼓の音色ねいろに聞き入った。いらいら
している人の心へ平和と慰安とを与えようとして遙かの青空から
でも来たようなまことに穏おだやかな音色であつて、それを聞いている
麟太郎の心は自然自然に柔らげられた。父の性格を受け継いで豪
放濶達の彼ではあつたが打ち続く貧困と饑餓のためにこの日頃心
は平和を失い、読んでいる書物の文字の意味さえ呑み込めないま

でになつていたが鼓の音色を耳にするや否や平和が立ち帰つて来たのである。

「それにしても老女は何者であろう。そしていったい何んのためにいつまでも鼓を打っているのであろう」

彼は不思議に思いながら厨くりやから外へ出て行つた。そして老女へ近付いた。彼の眼に真つ先に映つたのは、名匠の刻んだ姥うばの面のような神々こうごうしい老女の顔であつた。その次に彼の眼に付いたものは彼女の持つている鼓であつた。漆黒しつこくの胴、飴色の皮、紫の締め緒を房々と結んだやや時代ばんだその鼓は生命いのちない木製の楽器とは見えず声のある微妙な生物いきもののように彼の瞳に映つたのであつた。

「ご老女」と麟太郎は呼びかけた。しかしその後はどう云つてよいか継ぎ穂つむぎほに困こまじて黙もくつてしまつた。すると老女は仮面めんのような顔をわずか綻ほころばして笑つたが穏おだやかな調子でこう云つた。

「どうぞあなたのお芳こころよし志しをお施たすこしなされてくださいまし」

「容易たやすいことです、進すすませましょう」麟太郎は袂たもとへ手を入れたが鳥ち目めなどは一文もない。まして家の内を探したところで金のあ

りよう筈がない。彼は当惑して赤面したが焚たききかけの飯の事を思おもい出してにわかにわかに元氣付いて云うのであつた。

「鳥ちようもく目めとしてはござらぬが、饑饉ききんのおりから米飯こめいがござる。そ

れもわずかしかござらぬによつて俺わしの分ぶんだけ進すすませましょう——
急いそいで厨くりやへ駈かけ込んで湯氣いの上うへがつてゐる米飯こめいを鉢ひしへ移うつして持もつ

て来た。すると老女はうなずきながら穏かな声でこう云った。

「私は欲しゆうはござりませぬ。そこに仆れている饑えた人にそれを差し上げてくださいまし」

見ればなるほど往来の上に子を負った女が仆れている。子供の方は死んでいるらしい。麟太郎は女の側へ行つて鉢の飯を膝の前へ置いてやった。それから老女を振り返つて見たが、もうそこには老女はいなかつた。遙か離れた往来の人混みの中から鼓の音が、ちまたの巷に彷徨つていゝちまなこの血眼の人達の心の中へ平和と慰安と勇氣とを注ぎ込もうとするかのように穏かに鳴るのが聞こえては来たが……。

麟太郎はふとした動機からその時まで懸命に学んでいた支那の

学問を投げ捨てて当時流行の蘭学を取ったがこれが開運の基となつて彼の世界は展開された。彼はこんな順に立身した。

蛮書翻訳係。軍艦練習所教授方頭取。それから咸臨丸の船長として米国へ航海した事もあつた。作事奉行格並に軍艦奉行。もうこの頃は麟太郎は四十を幾年か越いくつしていた。そうして彼の名声は既に日本的になつていた。ある時は彼は塾を構えて有為の人材を養成した。坂本竜馬、陸奥宗光、いずれも彼の塾生であつた。

しかし喬木風強し矣い！幕府の執政に疑がわれて「寄合い」の身に左遷された。

ちようどこの時分の事であつた。鬱うっぼつ勃たる覇氣と忿懣とを胸たくわに貯えた麟太郎は上野の車坂を本所の方へ騎馬でいらいらと走ら

せていた。燈火の点き初めた夕暮れ時で往来には人々が出盛つていた。人声、足音、物売りの叫び。やかましいほど賑やかであった。その時、騒然たる物の音を縫って鼓の音が聞こえて来た。麟太郎は思わず馬を止めて音のする方へ眼をやった。三十年前に一度見た姥の面のような顔を持った上品な老女が彼を見ながら鼓を打っているではないか。彼の心は静かに和み海なごのように胸が開けて来た。

翌日彼は召し出されて軍艦奉行を命ぜられたのである。

その後麟太郎はもう一度だけ鼓の持ち主に邂逅いぎあつた。明治元年三月十三日のしかも日中のことである。この頃大江戸は釜で煮られる熱湯のように湧き立っていた。十五代続いた徳川家によく没落の悲運が来て、將軍慶喜よしのぶは寛永寺に屏居へいきよし恭順の意を示している一方、幕臣達は隊を組んで安房、下総、会津等へ日に夜に脱走を企てる。征討大総督有栖川宮ありすがわのみやは西郷隆盛を参謀として東山北陸東海の、三道に分れて押し寄せて来る。二百数十年泰平を誇ったさすが繁華な大江戸も兵燹へいせんにかかつて焼土となるのもここしばらくの間となった。贅沢ぜいたく出来るのも今のうちだ、それ酒を飲め女を買えと、町人達まで自暴自棄となつて悪事三昧いに耽けるようになった。切り取り強盗おしこみ、闇討ち放火つけび、至る

所に行なわれ巷の辻々には切り仆された武士の屍かばねが横たわつていたりまた武家屋敷の窓や塀には斬奸状が張られてあつたり、二百万人を包容していた幕府所在地の大きな都には平和の影さえも見られなくなつた。麟太郎は軍事取り扱かいという重大の役目を持つていたが強硬なる非戦論の主謀者として逸はやり立つ旗本八万騎を鎮撫しなければならなかつた。彼は官軍に内通している獅子身中の虫と見られ、ある夜のごときは数十人の兵にその身辺を取りまかれ鉄砲の筒口を一齐に向けられ硝煙に包まれたことさえあつた。「慶喜の生命いのちは助けなければならぬ。江戸を兵へいせん燹から守らなければならぬ。好い策はないか。よい策はないか」と、寧日のない騒忙の裏にこの事ばかりを考えた。

「西郷に会おう。西郷は知己だ。会つて赤誠せきせいを披瀝しよう」これが終局の決心であつた。こう決心はしたものの心にはかなりの不安があつた。多智大胆権謀無双はやぶさ、隼はやぶさのような彼ではあつたが、西郷との会見は重荷であつた。

当日になると式服を纏まとい馬上に鞭を携えて薩州の邸へ歩ませた。芝高輪しばたかなわまで向かう間に彼の眼に触れる事々物々は焦心の種ならぬはない。兵を近在に避けようとして荷車を曳く商あきゆうど人の群れ。刀の柄つかに手を掛けて四方に眼を配りながらノシノシ歩く家人けにんの群れ。店を開けている家は稀まれである。陽はカンカンと照つてはいるが街々の姿は暗く見える。

突然、横町から十人余りの幕兵が塊かたまって現われたが、互いに

耳打ちをしたかと思うと麟太郎の行く手を遮さへぎった。そしてその中の頭領らしい一人の武士が声を掛けた。

「しばらくお待ちください！」と。

麟太郎は静かに馬を止めた。それから彼らを見廻したが、「諸君の風貌は逼せまつてござるが、そもそも何事が起こりましたかな？」
鋭い口調で詰問した。

彼らはそれには答えなかった。

「そういうご貴殿こそどこへ参られるな？」

「君命を帯びて薩州邸まで……」

「江戸開け渡しのご相談にか？ フン」と一人が嘲笑った。麟太郎の張り切った神経はこの「フン」のために切れそうになった。

怒りの声を張り上げて一句嘲罵を報いようとした。その刹那聞こえて来たものが、例の鼓つづみの音である。春陽のようにも温かく松風のようにも清らかな、人の心を平和に誘う天籟てんらいのような鼓の音！

麟太郎の心に余裕が出来た。彼は穏かに微笑して訓すような口調でこう云った。

「諸君の身上はお察し申す。ただし、某それがしの考えはいささか諸君とは異なつてござる。江戸を開くも開かぬも皆將軍家のおためでござる。全く他に私心はおわござらぬ——諸君のために某それがし計るに、東照神君の英靈の在す駿州久能山に籠おわもられるこそ策の上なるものと存ぜられ申す。そこにて天下を窺うかがわせられい」

實げにもと思う武士達の顔をズラリと一渡り見廻してから彼は手た綱づなを搔い繰った。馬は肅々と歩を運ぶ。危険は瞬間に去つたのである。

彼と西郷との会見について後年彼はある人に次のようなことを語つたことがある。

「薩摩屋敷へ行つて見ると、すぐに一室へ案内された。しばらくすると西郷は洋服の足へ薩摩下駄を穿いて、熊次郎という僕しもべを従え平気な顔をして現われた。庭から室へはいつて来ると『先生おおきに遅刻し申した』こう云つてノツソリ座を構えたものだ。大事件を眼前に控えているようなそつた様子はどこにもない。俺も一向平気なものでしばらく雑談を交わしていたが、云うだけ

の事は云つてしまおうと俺は本題へはいつて行つた。懸河の弁を
早くしたもののさ。すると西郷は膝へ手を置き黙つて終いまで聴い
ていたが、

『いろいろ議論もございましょうが私が一身にかけましてお引き
受けすることに致しましょう』と卒直に一言云つたものだ。これ
で会見はお終いだ。そして慶喜公のお命と江戸の命とが保証され
たのさ」

爾来、麟太郎の生活は、やっぱり危険で困難であつた。がしか
しそのつど大勇猛心と海のように広い度量とで易やすやす々と荒あらかなみ濤なみを
凌しのいで行つた。彼はいつでも平和であつた。晩年になるといよいよ
益益彼の襟懷は穩かになつた。参議兼海軍卿。こんなに高い榮

誉の位置に一度は登ったこともある。従二位勲一等伯爵という、
顯爵さえも授けられた。とはいえ天性洒落の彼は誇りもたか驕ぶりも
しなかった。いつも門戸を開放し来るに任せて談笑した。官吏も
来れば相場師も来る。力士も来れば茶屋の女将おかみも来る。

それはある日のことであつたが、八百善やおせんの女将が機嫌伺いに彼
の屋敷を訪ずれた時、突然彼はこんなことを訊いた。

「女で、鼓の名人で、永生きをした者はなかつたかえ？ ……天
保の時分にもう老としより人で明治の初年まで生きていた……」

「さあ」と女将は不思議そうに彼の顔色を窺いながらしばらくじ
つと考えていたが、

「志賀山初という名人が近年まで生きておりましたが」

「どんな様子の女だったね？」

「なかなか上品のお婆さんでした」

「それじゃその人かも知れないな……俺は三度まで逢ったんだがね。それもいつも往来でね」

「それで、何んですか、ご前とは、何か関係でもございましたので？」

「あるといえばあつたようなもの、ないと云えばなかつたようなものさ……ところで、初というその老女はどんな具合に死んだかな？ 往来の上で野倒れ死たにかな？」

「まさかそんな事もありますまい」女将の返辞は平凡であつた。

明治三十一年の十二月十九日に彼は死んだ。眼を瞑とじる時こう

云つたと看護のある人が公開した。

「いよいよ俺ももういけねえ」と。これは恐らく聞き違いであろう。彼は恐らくこう云つたのであろう。

「いよいよ俺ももう聞けねえ」と。鼓が聞けないと云つたのであろう。

姓は、勝。通称は、麟太郎。そして号は海舟であつた。

青空文庫情報

底本：「怪しの館 短編」国枝史郎伝奇文庫28、講談社

1976（昭和51）年11月12日第1刷発行

初出：「サンデー毎日」

1924（大正13）年1月1日号

入力：阿和泉拓

校正：多羅尾伴内

2004年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

開運の鼓

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>